四

夕刻、笹塚孫一と磐音は、南町奉行所が密かに借り受けた下渋谷村の庄屋利右衛門方の離れ屋に移った。

その離れから栗林越しに高馬道平たちの暮らす百姓家が望めた。その上、離れ家の出入りが高馬たちから見られることなくできた。

南奉行所の出張り所というわけだ。

離れには八畳二間のほかに囲炉裏が切られた板の間があった。

そこへ年番方与力の笹塚孫一を頭分とした歌垣彦兵衛、木下一朗太ら同心、小者たち、それに品川宿の御用聞き、八つ山の数吉と手下たちが泊まりこむことになった。

さらに近くの百姓家から二人ばかり女を雇ってきて、男たちの飯の用意などをさせることにしていた。

笹塚は、囲炉裏端に座を占めた。かたわらに磐音が座らされた。

「正月早々、広尾原くんだりに出張るもの町方ならではの務めだ。坂崎、そなたもわしと知り合いになったのを悪縁と諦めろ」

「笹塚様、今度の一件ばかりは、いかな笹塚様のお出張りでも南町に大金は見込めませぬな」

磐音は笹塚の軽口に合わせるように訊いてみた。

笹塚は小さな体に清濁併せ飲む度量を持っていた。江戸で暗躍する悪人どもを捕まえると、笹塚はその者たちが盗み溜めた金子のうち、持ち主の不分明な金や返す当てのない金を公にはせず、奉行所の活動探索費に繰り入れていた。だからこそ、今宵のような機動力を発揮できたのだ。

裏の戸が開いて、すっかり百姓風に身を窶した小者が戻ってきた。

「笹塚様、増上寺別院には未だ鈴木香志郎が戻った様子はございませぬ」

頷いた大頭の与力が、

「必ず頭分の町人から高馬らにつなぎが入る。そいつを見逃すでない」

と言い放ち、

「坂崎、まあ、そなたは、出番が参ったときに働いてくればよい。酒でも飲んでおれ」

と機嫌よく言った。

大頭の下の広い額の下には、くちゃくちゃと配置された目、鼻、口があった。それがふいに崩れたように笑い。

「坂崎」

と磐音にだけ聞こえる声で囁いた。

「さっきののなたの指摘じゃがな。高力家の用人どのにちらりと鈴木香志郎とのことを知らせておいた。そのうち、もみ消し料を持ってくるわ。まあ、まず二百や三百は堅かろう」

と不敵な笑みとともに吐き捨てた。

磐音は正月三日から四日未明にかけて、南町奉行所の役人たちと下渋谷村の庄屋の離れで過ごした。

事件が動いたのは四日の昼下がりだ。

高馬らが巣食う百姓家にお店の手代風の男がやってきて四半刻もいた後、また古川沿いに東に下っていった。むろん八つ山の数吉と手先たちが巧妙にもその男をつけていった。さらに五つ時分に高馬道平、桂間某、磯崎某の三人が足拵えも十分に、借り受けていた百姓家を出ていった。

木下一朗太らが尾行に入った。

庄屋の離れに残ったのは笹塚と磐音だけだ。

「今宵、仕事をするかどうか、品川の親分が知らせてこよう」

笹塚は悠然と構えていたが、

「奴らの隠れ家を覗いてみるか」

と磐音を誘い、栗林を横切って高馬らの潜む百姓家を訪ねた。

二人はぐるりと家の周りを回って、残っている者がいないかどうか念のため調べた。いるふうはない。

笹塚が用意していた火種を提灯に灯した。

磐音が表戸を引くとがたぴしと開いた。

屋内には囲炉裏の火が薄く燃え残り、人のいた気配が漂っていた。酒と煙草と食べ物の匂いが戸口から吹き込む風にざわついて、磐音らの鼻腔を襲った。

囲炉裏端には徳利などが転がり、奥の間に夜具が覗いた。

笹塚は部屋に上がって高馬らの持ち物を探していたが、

「金目のものはなにものこされておらぬぞ。今宵のしごとを終えたら、どこぞに高飛びする気のようだ」

と推測した。

となれば、なんとして今宵の押し入り先を突き止めねばならいことになる。

二人が庄屋の離れに戻ると八つ山の親分の手先が待っていた。

「隠れ家を突き止めたか」

笹塚の問に手先が、

「へえ」

と頭を提げた。

「案内せえ」

手先に提灯を持たせ、笹塚と磐音がその後に従った。二人が肩を並べて歩くと頭一つも背丈が違うし、歩幅も違う。

それでも笹塚はちょこちょこと足を小刻みに動かして、磐音の足の速さに合わせた。

「笹塚様、頭分の隠れ家は、この川の下流、金杉河口の芝金杉裏町にございました」

「ほう、あそこならば、江戸の海に逃れるのも、大川沿いに神田川を遡って市谷御門に舟を着けるのも簡単だな」

「へえ、うちの親分の見立てでは、足の不自由な頭分はまずおっとりの百兵衛と見て違いなかろうと申しております」

「数吉は見たのか」

「へえ、夕刻前、床屋から戻った頭を見てございます」

「今宵、仕事をする模様か」

「頭が前に床屋に行って髭を当たらせ、髷を結い直してもらったのは、大晦日のことだったそうです。どうやら、おっとりには仕事前に身なりを整える癖がございますようで。となると今宵、どこぞに押し込む算段かと親分の推量にございます」

「よしよし、おっとりの百兵衛も年貢の納め時じゃ」

笹塚が吹き付ける風に向かって言い放った。

おっとりの百兵衛一味が隠れ家にしていたのは、芝金杉裏にある百坪ほどの敷地に黒板塀を引き回した妾宅風の家だ。陸奥会津藩の中屋敷との間のある堀に東側が面して、船が横付けできる。

笹塚孫一と坂崎磐音が対岸の湊町の河岸に着くと、すでに屋根船が金杉川に舫われて、一朗太らが詰めていた。

「一朗太、突き止めたそうじゃな」

笹塚が屋根船に身を滑らせて訊いて、

「二丁櫓がすでに用意されておりますし、まず間違いないかと思われます」

「数吉はどうした」

八つ山の親分のことを笹塚が気にした。

「手先の一人に身が軽いのがおりまして、なんとか隠れ家の床に忍び込むと頑張っておりますんで、数吉もそちらに参っております」

押し込み先が先に分かれば、前もって捕り物の手配ができる。だが、忍び込んだことが分かれば、押し込みそのものを中止する恐れもあった。

「まず八つ山の判断なれば、大丈夫と思うがな」

笹塚が不安を滲ませた言葉を洩らしたとき、

「ごめんなすって」

という数吉の声がして、屋根船の障子が開かれた。

「押し込み先が分かりましてございます。中橋広小路の茶道具商伏見屋に狙いをつけたようにございます。寺侍鈴木香志郎が住み込み女中を誑し込んで、裏木戸を開けさせる手筈がついておるようです」

中橋広小路というのは、日本橋を出た東海道筋、通り三丁目の次の辻だ。江戸の注進にある老舗の、暮れの売上金を狙ってのことだろう。

「ようやった、数吉」

老練な御用聞きをほめた笹塚は、

「それにしてもおっとりの野郎、南町奉行所も近い江戸のど真ん中で仕事をしてくれるじゃねえか。ふざけた手合いだぜ」

「中気持ちならどこぞの温泉にでも浸かって養生するがいいものを、江戸に舞い戻り、昔、覚えた踊りを繰り返そうなんぞ考えやがるから、ど壺に嵌まることになる」

笹塚は一朗太に視線を向けると、

「手配はできておるな」

と念を押した。

「はっ。おっとりの百兵衛一味が二丁櫓で押し出す前後をわれらも遠巻きに囲んで、楓川に向かう所存にございます」

「けっして気取られるなよ」

「笹塚様はどうなされますか」

「六年前に取り逃がしたおっとりを、今度ばかりは網の外に出すわけにもいくまい。坂崎の旦那と二人、伏見屋に先行してお待ち申そうか」

そう言った笹塚は磐音に合図を送ると、

ひょこひょこ

と屋根船から外に出た。

時鐘が八つを打った。するとそれが合図のように裏戸が引き開けられた。

「香志郎様」

「おおっ、おみつか」

女が裏戸から顔を覗かせ、女の部屋に入り込む約束の香志郎と一緒に伏見屋の敷地へと姿を消した。

さらにしばらくして表の潜戸が開かれ、鈴木香志郎が通りに向かって手を振った。すると暗がりに潜んでいたおっとりの百兵衛に高馬道平、磯崎某、桂間某の四人がゆっくりと潜り戸に近付いた。

「待っておったぞ、おっとりの百兵衛！」

凛然とした声が夜の闇に響き、御用提灯に火が入れられて一斉に掲げられた。

「な、なんだ、漏れてやがったか！」

すると明かりの輪の下に、陣笠に火事羽織、野袴姿で指揮十手を右手に持った、寸足らずの炭だれ五月人形のような男が立っていた。南町奉行所の知恵者与力、笹塚孫一である。

大頭にちょこんと陣笠はなんとも不釣合いの上に、小柄な腰に二本の大小が差されているところは、まるで串刺しにされた田楽のようでもある。

だが、この風体を見誤ると、年貢を納めさせられることになるのである。

「南町のちび与力か」

落ち着きを取り戻した百兵衛が、次いで伏見屋の中に向かって叫んだ。

「香志郎、女だろうがなんだろうが叩っ斬って、火を放ちな。その隙に逃げるぜ！」

百兵衛が身を屈めて潜り戸から伏見屋に入り込もうとし、高馬らが大刀を抜いて、頭の背後を守った。

その瞬間、潜りの向こうから投げ出されるように飛び出してきた人影があった。その人影がぶつかったため、百兵衛は地面に転がった。

「な、なにをしやがる！」

百兵衛が叫び、

「頭、済すまぬ」

と答えた鈴木香志郎が鬼の形相で背後を振り向いた。

御用提灯の明かりに照らされて姿を見せたのは、坂崎磐音だ。

「若い女子や年増の奥方を騙して手引きをさせるなんぞいけませんな」

磐音の声がのどかに響いた。

「て、てめえは何だ！」

飛び起きた香志郎が顔を朱に染めて叫んだ。

磐音は、一刻半も前、潜り戸を叩いた笹塚孫一の手引きで密やかに伏見屋の店に入り込み、百兵衛一味の押し込みを店の片隅で待ち受けていたのだ。

「南町の用心棒といったところかな」

「ふざけたことをぬかしやがって」

鈴木香志郎が細身の剣を抜き、中段に構えた。

新陰流の遣い手というだけになかなか堂にいった構えだ。

その間に杖をてにおっとりの百兵衛が立ち上がり、

「高馬の旦那、捕り方の網を切り破ってくだせえ。でねえと、わしら五人、三尺高いところに晒し首だぜ」

と言いざま、百兵衛は懐から合口を抜き、左手にかまえて笹塚を睨んだ。

さらに百兵衛は右手の杖を地面から浮かして振った。すると石突きが外れて鋭利な錐が現れ、笹塚に向かって飛んだ。加賀屋の主を刺し殺した凶器だ。

笹塚は手にした指揮十手で、飛んできた錐を叩き落とそうとした。だが、叩いた拍子に均衡を崩して地面に尻餅をついてしまった。

「一朗太、おっとりの一味を逃すでないぞ！」

尻餅をついた格好で笹塚が怒鳴った。

承知しました、と一朗太も叫び返した。

磐音は、囲まれた一味の配置に目をやりながら、備前包平二尺七寸を抜き、峰に返した。

香志郎は中段の細身の剣を磐音の喉首を狙って水平に、突きの構えに移行させた。

間合いは、一間。

磐音は、正眼に構えた。

「切り破るぜ！」

百兵衛の叫びが、押し込み一味と捕り方の攻防の合図になった。

「ひゅうっ！」

という声が鈴木香志郎のすぼめられた口から吐き出され、細身の切っ先が磐音を襲った。

磐音は、揺るぎもなく突っ込まれる剣先を凝視しながら、正眼の剣の峰で絡めた。

包平は夜の大気を鋭く切り裂いて襲い来る細身の剣を、真綿で包むように弾いていた。

香志郎は弾かれた瞬間、磐音の右手に逃れ、くるりと反転していた。さすがに敏捷な動きで無駄がない。

磐音はそのとき、再び正眼に戻していた。

香志郎は、突きに戻した剣をさらに右肩に引き付けるように八双に立てた。

「おのれ！」

声とともに八双の剣が磐音の肩口を襲った。

春先の縁側で日向ぼっこをする年寄り猫のような磐音の動きが豹変したのはそのときだ。

突進してくる香志郎の間合いを計りつつ、自らも香志郎の内懐に飛び込みざま、峰に返した包平を細い肩口に叩き込んでいた。

寸余の差で磐音が制し、肩口の骨を砕かれた香志郎が崩れるように転がった。

磐音は戦いの場を振り向いた。

木下一郎太が太子流の達人高馬道平に切り立てられ、腕や太股に何箇所か、手傷を負っているようだ。

そのかたわらでは、大頭の知恵者与力が、

「一朗太、怯むでないぞ」

と声を嗄らしていた。

おっとりの百兵衛、桂間、磯崎らも捕り方たちに囲まれて奮戦していた。

「木下どの、助勢いたす」

一朗太がほっとした声をだした。

磐音が高馬の正面に立つと笹塚が、

「坂崎、こやつは手強いぞ。それにお白洲の裁きは三尺高い獄門台と決まっておるわ、切り捨てて構わぬ」

と叫んだ。

磐音は、木下一朗太に振るっていた太刀風を思い出し、返した峰を元に戻した。

「お相手仕る」

「奉行所の狗めが」

血走らせた眼を磐音に向けた高馬道平は、厚みのある剣を上段に取った。

磐音は、太子流の剣が山根権現只四郎の創始した剣術としか知らなかった。

一朗太を斬り立てた剣には、並々ならぬ技と力が込められていた。

磐音は気を集中させると包平を正眼にとった。

高馬は、一気に襲ってきた。

降り積もった雪が雪崩れ落ちるように突進すると、上段の剣を迷いなく磐音の眉間に振り下ろした。

磐音は高馬の刃風を聞いて踏み込んだ。踏み込みながら、豪快に振るわれる剣に擦り合わせ、力を吸い取るように弾いた。

居眠り剣法の真骨頂だ。

相手が技を振るっても振るっても、力を削ぎ取られたように返される。

二人の位置はくるくると替わり、高馬の攻撃はことごとく磐音の防備に跳ね返された。

高馬は初めて立ち合った剣法に苛立ちを感じていた。

攻守が繰り返され、次の瞬間、互いに反転して替わった。

とそのとき、高馬は身を回しながら、弾かれた剣を素早く引き付け、磐音の首筋を撫で斬るように落とした。

高馬の刀遣いは焦りのために雑になっていた。

磐音はそのことを見ながら、包平を水平に脇に落とした。首筋を襲い来る剣を意識しながら、踏み込んだ。踏み込むと同時に脇構えの剣を車輪に振るった。

磐音の目は迫り来る刃を感じつつ、その手は高馬の脇腹を深くえぐる感触を得ていた。

眼前に迫り来た剣がふいに消えた。そして、高馬が前転するように虚空に舞うと、

どさり

と伏見屋の表戸の前に崩れ落ちた。

磐音は血刀を構え直して、辺りを見た。

おっとりの百兵衛が八つ山の数吉親分の膝に組み敷かれ、桂間も磯崎も突棒や袖搦みに抑え込まれていた。

「悪党どもに縄を打て！」

笹塚孫一の誇らしげな声が中橋広小路に響いた。